

# 日本近代 文学作品选读

范亚秋 王岩 朱子杰 贾丽◎编著  
〔日〕中嶋英介◎日语校译



兰州大学出版社  
LANZHOU UNIVERSITY PRESS

# 日本近代 文学作品选读

范亚秋 王岩 朱子杰 贾丽◎编著  
〔日〕中嶋英介◎日语校译



兰州大学出版社  
LANZHOU UNIVERSITY PRESS



## 图书在版编目 (C I P) 数据

日本近代文学作品选读 / 范亚秋等编著. -- 兰州 :  
兰州大学出版社, 2016. 12  
ISBN 978-7-311-05106-8

I. ①日… II. ①范… III. ①日语—阅读教学—高等  
学校—教材②日本文学—作品综合集—近代 IV.  
①H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2016)第321776号

责任编辑 马继萌 施援平 王曦莹  
封面设计 王曦莹

---

书 名 日本近代文学作品选读  
作 者 范亚秋 王 岩 朱子杰 贾 丽 编著  
[日]中嶋英介 日语校译  
出版发行 兰州大学出版社 (地址:兰州市天水南路222号 730000)  
电 话 0931-8912613(总编办公室) 0931-8617156(营销中心)  
0931-8914298(读者服务部)  
网 址 <http://www.onbook.com.cn>  
电子信箱 [press@lzu.edu.cn](mailto:press@lzu.edu.cn)  
印 刷 兰州人民印刷厂  
开 本 710 mm×1020 mm 1/16  
印 张 16.5  
字 数 264千  
版 次 2016年12月第1版  
印 次 2016年12月第1次印刷  
书 号 ISBN 978-7-311-05106-8  
定 价 20.00元

---

(图书若有破损、缺页、掉页可随时与本社联系)

## 前 言

日本具有悠久的文学传统,拥有丰富多彩的文学遗产。日本的小说、诗歌、散文和戏剧都具有浓郁的民族特色,在世界文学长廊中绽放异彩。阅读日本文学精品佳作,领略日本文学的纤细精美,感悟作者的思维走向,体会其中的深刻意境,无疑可以帮助学生在获得更高水准的日语阅读能力、提高文学分析鉴赏能力的同时,进一步了解日本人的思维方式,把握日本社会发展变化的脉络,从而开阔视野,以更深层次认知世界。

本书《日本近代文学作品选读》为已具有日语中级阅读能力的日语语言文学专业高年级学生作为教材或阅读资料使用,基本可以满足大学课堂教学的实施,也为广大日语爱好者、日本文学爱好者提高日语阅读能力,提高日本文学修养提供了方便,是一个拓宽视野的窗口。

本教材是编者结合自己多年的教学和研究经验,从浩如烟海的日本近代小说中选取具有代表性的作家及作品编写而成的。教材由十三课组成,每课内容由作品原文、语句注释、作者介绍、所属流派、作品评价、中文译文六个部分组成。作品正文选自作家的作品,个别短篇为全文外,部分长篇是节选的精华部分。作品中的难读词语注有假名。语句注释主要是难词的释义或提示词语在作品中的含义。作者介绍包括作者的生平、主要作品及其在文坛上的地位与影

响。作品评价主要是引用部分相关先行研究中学者们围绕作品的故事梗概、主题思想、创作背景、人物特征及语言风格等所做的简要分析与评价，以供读者参考借鉴。

本书获兰州大学外国语学院教学科研创新学术团队建设项目（16LZUWYXSTD009）资金资助。第一课至第三课由朱子杰编著，第四课至第十课由范亚秋编著，第十一课至第十三课由贾丽编著，王岩负责全书书稿的审定工作。另外，西安交通大学日语系霍士富教授为全书的选材和整体构思提供了宝贵意见，兰州大学日籍教师中嶋英介为全书日文部分进行校译，在此一并表示深深的谢意。

由于编者学识有限，书中肯定有诸多纰漏与谬误之处，敬请使用本教材的师生们多多提出宝贵意见，以便我们今后更好地完善这部教材。

编者

2016年7月

## 目 录

第一課	学問のすすめ（抜粹）	福沢諭吉	.....1
第二課	浮雲（抜粹）	二葉亭四迷	.....14
第三課	十三夜（抜粹）	樋口一葉	.....35
第四課	舞姫	森鷗外	.....47
第五課	蒲団（抜粹）	田山花袋	.....68
第六課	夢十夜	夏目漱石	.....86
第七課	春琴抄（抜粹）	谷崎潤一郎	.....131
第八課	城の崎にて	志賀直哉	.....145
第九課	鼻	芥川龍之介	.....161
第十課	セメント樽の中の手紙	葉山嘉樹	.....177
第十一課	伊豆の踊子（抜粹）	川端康成	.....187
第十二課	走れメロス	太宰治	.....211
第十三課	注文の多い料理店	宮沢賢治	.....237
参考书目			.....255

## 第一課 学問のすすめ (抜粋)

### 初編

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。されば<sup>1</sup>天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら<sup>きせん</sup>貴賤上下の差別なく、万物の靈たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を<sup>と</sup>資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの<sup>2</sup>安楽にこの世を渡らしめ<sup>3</sup>給うの趣意なり<sup>4</sup>。されども今、広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。その次第はなはだ明らかなり。『実語教』<sup>5</sup>に、「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざる<sup>6</sup>とによりてできるものなり。また世の中にむずかしき仕事も

1 [されば] 前述の事柄の当然の結果として起こることを表す。そんなわけで。そうであるから。だから。

2 [おのおの] めいめい。それぞれ。各自。

3 [しめ] 「しめる」の活用。用言や助動詞「なり」「たり」などの未然形に付く。荘重な文章や講演口調の言いまわしなどに用いられる。使役の意を表す。…せる。…させる。

4 [なり] 体言および体言に準じるもの、活用語の連体形、形容動詞の語幹、助詞「と」「て」「ば」などに付く。断定の意を表す。…だ。…である。

5 『実語教』 平安時代末期から明治初期にかけて普及していた庶民のための教訓を中心とした初等教科書である。

6 「ざる」文語の打消しの助動詞「ず」の連体形。動詞および一部の助動詞の未然形に付く。打消しの意を表す。文章語的表現や慣用的表現に用いられる。

あり、やすき仕事もあり。そのむずかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人という。すべて心を用い、心配する仕事はむずかしくして、手足を用うる力役はやすし。ゆえに医者、学者、政府の役人、または大なる商売をする町人、あまたの奉公人を召し使う大百姓<sup>1</sup>などは、身分重くして貴き者と言うべし。

身分重くして貴ければおのずからその家も富んで、下々の者より見れば及ぶべからざるようなれども<sup>2</sup>、その本を尋ぬればただその人に学問の力あるとなきとによりてその相違もできたるのみにて、天より定めたる約束にあらず。諺<sup>ことわざ</sup>にいわく、「天は富貴を人に与えずして、これをその人の働きに与うるものなり」と。されば前にも言えるとおおり、人は生まれながらにして貴賤・貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。

学問とは、ただむずかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。これらの文学もおのずから人の心を悦ばしめずいぶん調法なるものなれども、古来、世間の儒者・和学者などの申すよう、さまで<sup>3</sup>あがめ貴むべきものにあらず。古来、漢学者に世帯<sup>4</sup>持ちの上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人もまれなり。これがため心ある町人・百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟<sup>ひっきょう</sup><sup>5</sup>その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。

されば今、かかる<sup>6</sup>実なき学問はまず次にし、もっぱら勤むべきは人間普

1 [大百姓] 多くの田畑を所有している豊かな農家。豪農。

2 [なれども] 断定の助動詞「なり」の已然形+接続助詞「ども」から。前の事柄とあとの事柄が、反対・対立の関係にあることを示す。であるが。けれども。なれど。

3 [さまで] それほど。そんなにまで。

4 [世帯] 一家を構えて独立した生計を営むこと。

5 [畢竟] さまざまな経過を経て最終的な結論としては。つまるところ。結局。要するに。

6 [かかる] こんな。このような。

通日用に近き実学なり。譬<sup>たと</sup>えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言<sup>もんごん</sup>、帳合いの仕方、算盤<sup>そろばん</sup>の稽古<sup>てんびん</sup>、天秤の取扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条ははなはだ多し。地理学とは日本国中はもちろん世界万国<sup>ふうど</sup>の風土道案内なり。究理学とは天地万物の性質を見て、その働きを知る学問なり。歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物なり。経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。修身学とは身の行ないを修め、人に交わり、この世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり。

これらの学問をするに、いずれも西洋の翻訳書を取り調べ、たいていのことは日本の仮名にて用を便じ、あるいは年少にして文才ある者へは横文字<sup>1</sup>をも読ませ、一科一学も実事を押え、その事につきその物に従い、近く物事の道理を求めて今日用の用を達すべきなり。右<sup>2</sup>は人間普通の実学にて、人たる者は貴賤上下の区別なく、みなことごとくたしなむべき心得なれば<sup>3</sup>、この心得ありて後に、士農工商おのおのその分を尽くし、銘々の家業を営み、身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべきなり。

学問をするには分限を知ること肝要なり。人の天然生まれつきは、繫<sup>つな</sup>がれず縛られず、一人前の男は男、一人前の女は女にて、自由自在なる者なれども、ただ自由自在とのみ唱えて分限<sup>ぶんげん</sup>を知らざればわがまま放蕩に陥ること多し。すなわちその分限とは、天の道理に基づき人の情に従い、他人の妨げをなさずしてわが一身の自由を達することなり。自由とわがままとの界<sup>さかい</sup>は、他人の妨げをなすとなさざるとの間にあり。譬<sup>たと</sup>えば自分の金銀を費やしてなすことなれば、たとい酒色<sup>ふけ</sup>に耽り放蕩を尽くすも自由自在なるべきに似たれども、けっして然<sup>しか</sup>らず、一人の放蕩は諸人の手本となり、ついに世間の風俗を乱りて人の教えに妨げをなすがゆえに、その費やすところの金銀はその人

1 [横文字] 横に書きつづる文字。西洋文字・梵字・アラビア文字など。特に、西洋文字をいう。

2 [右] この文は元々縦書きのゆえに、ここの「右」は上記の意。

3 [なれば] 断定の助動詞「なり」の已然形+接続助詞「ば」。それだから。したがって。

のものたりとも、その罪許すべからず。

また自由独立のことは人の一身にあるのみならず、一国の上にもあることなり。わが日本はアジャ州の東に離れたる一個の島国にて、古来外国と交わりを結ばず、ひとり自国の産物のみを衣食して不足と思ひしこともなかりしが、嘉永年中アメリカ人渡来せしより外国交易のこうえきこと始まり、今日の有様に及びしことにて、開港の後もいろいろと議論多く、鎖国攘夷などとかましく言ひし者もありしかども、その見るところはなほだ狭く、諺ことわざに言う「井の底の蛙かわず」にて、その議論とるに足らず。日本とても西洋諸国とても同じ天地の間にありて、同じ日輪に照らされ、同じ月を眺め、海をともにし、空気をともにし、情合い相同じき人民なれば、ここに余るものは彼に渡し、彼に余るものは我に取り、互いに相教え互いに相学び、恥ずることもなく誇ることもなく、互いに便利を達し互いにその幸いを祈り、天理人道に従いて互いの交わりを結び、理のためにはアフリカの黒奴にも恐れ入り、道のためにはイギリス・アメリカの軍艦をも恐れず、国の恥辱とありては日本国中の人民一人も残らず命すを棄てて国の威光を落とさざるこそ、一国の自由独立と申すべきなり。

しかるを支那人などのごとく、わが国よりほかに国なきごとく、外国の人を見ればひとくちに夷狄夷狄と唱え、四足にてあるく畜類のようにこれを賤しめこれを嫌きらい、自国の力をも計らずしてみだりに外国人を追い払わんとし、かえってその夷狄くるに窘しめらるるなどの始末は、実に国の分限を知らず、一人の身の上にて言えば天然の自由を達せずしてわがまま放蕩に陥る者と言うべし。王制一度新ひとたびたなりしより以来<sup>1</sup>、わが日本の政風大いに改まり、外は万国の公法をもって外国に交わり、内は人民に自由独立の趣旨を示し、すでに平民みょうじへ苗字・乗馬を許せしがごときは開關以来の一美事、士農工商四

1 [王制一度新たなりしより以来] 1868年の明治維新以来。

民の位を一様にするの基<sup>もとい</sup>ここに定まりたり<sup>1</sup>と言うべきなり。

されば今より後は日本国中の人民に、生まれながらその身につきたる位などと申すはまずなき姿にて、ただその人の才徳とその居処<sup>きよしょ</sup>とによりて位もあるものなり。たとえば政府の官吏を粗略にせざるは当然のことなれども、こはその人の身の貴きにあらず、その人の才徳をもってその役儀を勤め、国民のために貴き国法を取り扱うがゆえにこれを貴ぶのみ。人の貴きにあらず、国法の貴きなり。旧幕府の時代、東海道にお茶壺<sup>2</sup>の通行せしは、みな人の知るところなり。そのほか御用<sup>たか</sup><sup>3</sup>の鷹は人よりも貴く、御用の馬には往来の旅人も路を避くる等、すべて御用の二字を付くれば、石にても瓦<sup>かわら</sup>にても恐ろしく貴きもののように見え、世の中の人も数千百年の古よりこれを嫌いながらまた自然にその仕来りに慣れ、上下互いに見苦しき風俗を成せしことなれども、畢竟これらはみな法の貴きにもあらず、品物の貴きにもあらず、ただいたずらに政府の威光を張り人を畏して人の自由を妨げんとする卑怯なる仕方にて、実なき虚威というものなり。今日に至りてはもはや全日本国内にかかる浅ましき制度、風俗は絶えてなきはずなれば、人々安心いたし、かりそめにも政府に対して不平をいやくことあらば、これを包みかくして暗<sup>かみ</sup><sup>うら</sup>に上を怨むることなく、その路を求め、その筋により静かにこれを訴えて遠慮なく議論すべし。天理人情にさえ叶うことならば、一命をも抛<sup>なげう</sup>ちて争うべきなり。これすなわち一国人民たる者の分限と申すものなり。

前条に言えるとおおり、人の一身も一国も、天の道理に基づきて不羈自由なるものなれば、もしこの一国の自由を妨げんとする者あらば世界万国を敵とするも恐るるに足らず、この一身の自由を妨げんとする者あらば政府の官吏も憚<sup>はばか</sup>るに足らず。ましてこのごろは四民同等の基本も立ちしことなれば、

1 [たり] 動詞および動詞型活用の助動詞の連用形に付く。現代語の完了の助動詞「た」の古語形。

2 [お茶壺] 宇治茶を徳川將軍家に献上するための茶壺を運ぶ行列のこと。江戸から東海道を經由して茶壺を下し、帰路は中山道を利用した。

3 [御用] 朝廷・幕府・奉行所・諸藩などの用事・入用の尊敬語。

いずれも安心いたし、ただ天理に従いて存分に事をなすべしとは申しながら、およそ人たる者はそれぞれの身分あれば、またその身分に従い相応の才徳なかるべからず。身に才徳を備えんとするには物事の理を知らざるべからず。物事の理を知らんとするには字を学ばざるべからず。これすなわち学問の急務なるわけなり。

昨今の有様を見るに、農工商の三民はその身分以前に百倍し、やがて士族と肩を並ぶるの勢いに至り、今日にても三民のうちに人物あれば政府の上に採用せらるべき道すでに開けたることなれば、よくその身分を顧み、わが身分を重きものと思ひ、卑劣の所行あるべからず。およそ世の中に無知文盲の民ほど憐れむべくまた悪むべきものはあらず。智慧なきの極みは恥を知らざるに至り、己が無智をもつて貧窮に陥り飢寒に迫るときは、己が身を罪せずしてみだりに<sup>あわ</sup>傍<sup>おの</sup>の富める人を怨み、はなはだしきは徒党を結び強訴・一揆などとして乱暴に及ぶことあり。恥を知らざるとや言わん、法を恐れずとや言わん。天下の法度を頼みてその身の安全を保ち、その家の渡世をいたしながら、その頼むところのみを頼みて、己が私欲のためにはまたこれを破る、前後不都合の次第ならずや。あるいはたまたま<sup>みもとたし</sup>身本慥かにして相応の身代ある者も、<sup>たくわ</sup>金銭を貯<sup>おど</sup>うことを知りて子孫を教うることを知らず。教えざる子孫なればその愚なるもまた怪しむに足らず。ついには遊惰放蕩に流れ、先祖の家督<sup>さと</sup>をも一朝の煙となす者少なからず。

かかる愚民を支配するにはとても道理をもつて<sup>さと</sup>諭すべき方便なければ、ただ威をもつて<sup>おど</sup>畏すのみ。西洋の<sup>ことわざ</sup>諺に「愚民の上に<sup>から</sup>苛き政府あり」とはこのことなり。こは政府の苛きにあらず、愚民のみずから<sup>わざわい</sup>招く災なり。愚民の上に苛き政府あれば、良民の上には良き政府あるの理なり。ゆえに今わが日本国においてもこの人民ありてこの政治あるなり。仮りに人民の徳義今日よりも衰えてなお無学文盲に沈むことあらば、政府の法も今一段嚴重になるべ

1 [家督] 相続すべきその家の財産・事業などの総体。跡目。

く、もしまた、人民みな学問に志して、物事の理を知り、文明の風に赴くことあらば、政府の法もなおまた寛仁大度の場合に及ぶべし。法の苛きと寛やかなるとは、ただ人民の徳不徳によりておのずから加減あるのみ。人誰か苛政を好みて良政を悪む者あらん、誰か本国の富強を祈らざる者あらん、誰か外国の侮りを甘んずる者あらん、これすなわち人たる者の常の情なり。今の世に生まれ報国の心あらん者は、必ずしも身を苦しめ思いを焦がすほどの心配あるにあらず。ただその大切なる目当ては、この人情に基づきてまず一身の行ないを正し、厚く学に志し、博く事を知り、銘々の身分に相応すべきほどの智徳を備えて、政府はその政を施すに易く、諸民はその支配を受けて苦しみなきよう、互いにその所を得てともに全国の太平を護らんとするの一事のみ。今余輩の勸むる学問ももっぱらこの一事をもって趣旨とせり。

## 【作者紹介】

福澤 諭吉 (ふくざわ ゆきち) (1835年1月10日—1901年2月3日) は、日本の武士、蘭学者、著述家、啓蒙思想家、教育者。摂津国大坂堂島浜 (現・大阪府大阪市福島区福島 1 丁目、通称ほたるまち) にあった豊前国中津藩 (現・大分県中津市) の蔵屋敷で下級藩士・福澤百助と妻・於順の次男 (末子) として生まれる。慶應義塾の創設者であり、専修学校 (後の専修大学)、商法講習所 (後の一橋大学)、神戸商業講習所 (後の神戸商業高校)、土筆ヶ岡養生園 (後の北里研究所)、伝染病研究所 (現在の東京大学医科学研究所) の創設にも尽力した。新聞『時事新報』の創刊者。他に東京学士会院 (現在の日本学士院) 初代会長を務めた。そうした業績を元に明治六大教育家として列される。1984年 (昭和五十九年) から日本銀行券一万円紙幣表面の肖像に採用されている。

福澤の学問的・思想的源流に当たるのは、亀井南冥や荻生徂徠である、諭吉の師・白石照山は陽明学や朱子学も修めていたが亀井学の思想に重きを置

いていた。したがって、諭吉の学問の基本には儒学が根ざしており、その学統は白石照山・野本百蔵・帆足万里を経て、祖父・兵左衛門も門を叩いた三浦梅園にまで遡ることが出来る。のちに蘭学の道を経て思想家となる過程の中にも、この学統が原点にある。

2000年（平成十二年）3月12日付で朝日新聞が企画した「この1000年・日本の政治リーダー読者人気投票」という特別企画が生まれ、西暦1000年から1999年の間に登場した歴史上の人物の中から、「あなたが一番好きな政治リーダー」を投票する企画で、得票数7863票のうち、第6位の豊臣秀吉（382票）に次ぐ第7位（330票）にランクインするなど、国民的な人気がある。

## 【所属流派】

### 啓蒙文学

明治初年から明治二十年ごろまでを、日本では広く啓蒙期と呼ぶ。啓蒙とは、「蒙きを啓く」の意で、鎖国政策のために、世界情勢よりも三百年近く遅れてしまった日本にとっては、まさに啓蒙と呼ぶにふさわしい時期であった。この時期には、西洋列強に対抗し得る統一国家の確立を目指して、西洋文明を紹介した翻訳小説が現れ、さらに、国内における自由民権運動の高まりに応じて、その思想浸透を目的とした政治小説が生み出された。翻訳小説や政治小説は、文明・思想の紹介や政治的啓蒙が目的であったため、文学的な価値は十分ではなかったが、文学への関心を広く一般社会人に与え、当時の文学に新風を送った点で、文学史的意義は大きい。1873年（明治六年）、当時一流の洋学者が集まって、明六社が結成された。彼らは、機関誌「明六雑誌」を通じて、いろいろの分野にわたる啓蒙的な意見を発表した。中でも、福沢諭吉は「学問のすすめ」「文明論之概略」で、中村敬宇は訳書「西国立志編」で、当時の知識層・青年層に大きな影響を与えた。

## 【評価】

福沢の『学問のすすめ』が広く読まれて、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといえり」とあったように人間の自由と平等といった近代思想の原理の紹介と普及を啓蒙の中心に置き、実学・立身出世を主張し、多くの日本人に力強い指針を与えた。

《新編日本文学史》（第二版），崔香兰，大连理工大学出版社 2009 年，188 页

福沢の著作を仮に二つの時期に大きく分ければ、『学問ノススメ』は前期で著作の総決算であるとともに、後期の著作の出発点といえる。これ以降、現れる幾多の著書の骨格は、一応この本にそなわっていると言える。…アメリカの元駐日大使ライシャワーも大の福沢ファンで、かれは『学問ノススメ』を「偉大な著書」とたたえ、「明治の多くの指導者中、もっとも偉大な人物は福沢の思想だけである」と言っている。ライシャワー氏の言葉は多少割引し（ママ-編者注）て考えても、福沢の影響はどれほど大きいか伺えるものである。

《日本近现代文学精读》，王述坤，南京大学出版社 2009 年，7 页

《劝学篇》通篇讲的是人的权利和人的发展，开篇第一句话就是“天不生人上之人，也不生人下之人”。作者从西方“天赋人权”的理论出发，抨击了封建制度和陈旧的伦理道德观念，指出人是生来平等的。“所以有贤愚之别是由于学与不学造成的”，因此他要“劝学”，号召日本人民学习科学文化，追求真理，发扬独立精神，提高个人素质。

《20 世纪日本文学史——以小说为中心》，谢志宇，浙江大学出版社 2005 年，62 页

## 【中文译文】

## 初篇

“天不生人上之人，也不生人下之人”，这就是说天生的人一律平等，不是生来就有贵贱上下之别的。人类作为万物之灵，本应依凭身心的活动，取得天地间一切物资，以满足衣食住的需要，大家自由自在、互不妨害地安乐度日。但如环顾今日的人间世界，就会看到有贤人又有愚人，有穷人又有富人，有贵人又有贱人，他们之间似乎有天壤之别。这究竟是怎么一回事呢？理由很明显。《实语教》说：“人不学无智，无智者愚人。”所以贤愚之别是由于学与不学所造成的。加之，世间有困难的工作，也有容易的工作，做困难工作的叫作身份高的人，做容易工作的叫作身份低的人。大凡从事操心劳神和冒风险的工作是困难的，使用手足从事劳力的工作是容易的。因此把医生、学者、政府官吏、做大买卖的巨商和雇用许多帮工的富农叫作身份高的贵人。

由于身份高贵，家里也自然富足起来，在下面的人看来就高不可攀了。但如追根溯源，就可以知道这只是其人有无学问所造成的差别，并不是天命注定的。俗语说：“天不给人富贵，人们须凭勤劳来获得富贵。”所以如上所述，人们生来并无富贵贫贱之别，唯有勤于学问、知识丰富的人才能富贵，没有学问就成为贫贱的人。

所谓学问，并不限于能识难字，能读难懂的古文，能咏和歌和作诗等不切人世实际的学问。这类学问虽然也能给人们以精神安慰，并且也有些益处，但是并不像古来世上儒学家和日本国学家们所说的那样可贵。自古以来，很少汉学家善理家产；善咏和歌，而又精于买卖的商人也不多。因此有些具有心机的商贾农人，看到子弟全力向学，却担心家业中落，这种做父亲的心情是可以理解的，这就是这类学问远离实际不切合日常需要的明证。

所以我们应当把不切实际的学问视为次要，而专心致力于接近世间一般日用的实学，如学习伊吕波四十七个字母，练习写信记账，学会打算盘和使用天平等等。更进一步，还有很多要学习的学科。例如地理学介绍日本国内及世界万国的风土情况；物理学考察天地万物的性质并探究其作用；历史是详记年代

研究古今万国情况的典籍；经济学是从一身一家的生计讨论到国家世界的生计的学问；修身学则阐述合乎自然的修身交友和处世之道。

在学习这些学问时，均可参考西洋的译本，书中内容大多用日本字母书写，学习至便。至于有才能的青年，则可兼学外文，对各项科学都实事求是，就每一事物深切追求真理，以满足当前的需要。以上是世间一般的实学。如果大家不分贵贱上下，都爱好这些学问，并有所体会，而后士农工商各尽其分，各自经营家业，则个人可以独立，一家可以独立，国家也就可以独立了。

治学的要道在于懂得守本分。人们自降生到自然界以来，本来不受任何拘束。生为一个男人就是男人，生为一个女人就是女人，并且是自由自在的。但如仅仅高唱自由自在，而不懂得守本分，则易陷于恣情放荡。所以本分就意味着基于天理，顺乎人情，不妨害他人而发挥自己的自由。自由与恣情放荡的界限也就在于是否妨害他人。譬如花自己的钱，即使耽于酒色，放荡无忌，似乎是个人的自由，其实绝对不然。由于一个人的放荡能成为众人的榜样，终至于紊乱世间风俗，有伤教化，因此他所花的虽然是自己的钱，而其罪是不可宽恕的。

自由独立又不限于个人，还适用于国家。我们日本是远处亚洲东部的一个岛国。自古不与外国交接，仅凭本国的物产自给衣食，也并没有感到不足。自从嘉永年间美国人来日以后才开始对外交易，一直演变到今天这种情况。开禁后议论纷纭，其中有人叫嚣锁国攘夷，但所见异常狭隘，有如俗语所谓“井底之蛙”，其议论是不足取的。日本和西洋各国都存在于同一天地之间，被同一太阳所照耀，观赏同一月亮，有着共同的海洋与空气，要是人民情投意合，将彼此多余的物资相互交换，并进行文化交流，就不会发生耻辱和骄矜的感觉，而能同获便利，共谋幸福，并本诸天理人情而互相友好。只要真理所在，就是对非洲的黑人也要畏服，本诸人道，对英美的军舰也不应有所畏惧。如果国家遭到侮辱，全体日本国民就应当拼着生命来抗争，以期不使国威失坠。只有这样才能可以说是国家的自由独立。

至于像中国人那样，觉得除本国以外似乎没有别国存在，一见着外国人就呼为夷狄，把他们看作四只脚的牲畜，贱视他们，厌恶他们，不计量自己的国